ようぼくはおさづけの取り次ぎを

――たすけ心を湛（たた）え　積極的に取り次ごう――

修養科では、毎日夕づとめ遥拝時におさづけを取り次いでいる。
取り次ぐ側も取り次がれる側も、真剣にたすかりを願う。

真明

発行所
天理教芦津大教会
〒546－0003
大阪市東住吉区
今川8丁目6番32号
電話　06（6702）1980
FAX　06（6700）1854
Eメール　shinmei@ashitsu.or.jp
印刷所　天理時報社

道具でもどんな金高い値打でも、心の理が無くば何にもならん。さづけ〳〵の処、よう聞き分け。

明治23年7月7日

おさづけの理が、まだ限られた方だけしか拝戴できなかった頃、眞明組の先人たちは病人があると聞くと、人数を揃（そろ）え道具を携（たずさ）えてその家に出かけ、病人の枕元でお願いづとめを勤めました。特に重病人となれば、朝三座、昼三座、夜三座のお願いづとめを3日間続け、それでも駄目ならもう3日と、一身一家の都合を捨てのお願いづとめでした。中には「私の命を○年縮めて結構です」とお願いする人もおり、こうした命懸けの真剣なおつとめによって、どんな重病人もたすけていただきました。

今、私たちは、願い出て別席を運べば、御存命の教祖から尊きおさづけの理を拝戴することができます。この素晴らしい「宝物」は、ただ戴いただけでは意味がありません。おたすけに使うことによって、初めて教祖にお喜びいただけるのです。

取り次ぐ者と取り次がれる者の心の真実を、親神様はお受け取りくださり、どのような不思議なたすけもお現しくださいます。眞明組の先人たちがお願いづとめに込めたたすけ心を手本に、我欲や自らの都合を捨て、病む人のたすかりを心の底から願って、積極的におさづけを取り次がせていただきましょう。

四方正面

孫が書いた作文が新聞に載ったと、あるようぼくがうれしそうに新聞の切り抜きを見せてくれた。「今後は、わたしが」という題名で「わたしは5年生になってやりたいことがあります。下級生のお手本になることです。理由は、これまでの上級生が下級生のお手本になっていたからです」と、転んだときに声を掛けて保健室まで連れて行ってくれたこと、昼休みに一人でいると一緒に遊んでくれたことなど、名前も知らない上級生がしてくれた出来事を記し、「わたしはもう5年生です。助けられたときのように、今度はわたしが助けてあげたいと思っています」と綴（つづ）られていた。

とても心が温かくなるとともに、世界一れつ兄弟姉妹（きょうだい）として、御恩報じの思いで目の前の自分にできるおたすけの実行を心がけたいと思う。

（洋）

《６月月次祭　挨拶》

眞明組講名拝戴140周年の年も 折り返しの時期に

大教会長　井筒梅夫

皆様方には、たすけ一条の道の上に心勇んでご丹精くださいまして、大変ご苦労様でございます。コロナの緊急事態宣言は解除されましたが、まだまだ出口は見えておりません。そうした状況の中にも大教会の６月の月次祭にお帰りくださり、只今ともどもに滞りなく勤めさせていただきましたことは、誠に有り難い次第でございます。この月に感じたところを少しお話して、ご挨拶にいたしたいと思います。

さて、６月１日に道友社から刊行されました『すきっと』という雑誌がありますが、そこに、「なごり雪」で有名な歌手のイルカさんのインタビュー記事が掲載されていました。その中で彼女は、このような話をしています。

それは、「今回のコロナも、何か目に見えない大自然のようなものによる人間への教育なんじゃないかと思うんです。それは〝親心〟でもあります。親が子供に何かを教える際、ときに温かく、ときに厳しくしますよね。そういう親心が、私たちに向けられていると感じています。」（『すきっと』36号　25頁）と述べられているのです。

こうした著名人の中にも、私たちお道を信仰する者と同じような考えを持つ人もいるのだなと、何か心がほっこりとする記事でした。

このコロナ禍は親神様が世界の人々に、殊にお道の信仰者に対して、人をたすける心に入れ替えてほしい、皆が陽気づくめの心になって、互いに一れつ兄弟姉妹として仲良くたすけ合ってほしい、そして陽気ぐらしを味わってもらいたいとの親心の表れでありましょう。ですから長引くコロナ禍は、私たちが我が身勝手な考え方、自己中心の心をたすけ一条の心に切り替える機会であります。

先日、内統領先生から心に沁みるお話を聞かせていただきました。

ある修養科生が、神殿の東回廊で車椅子の男性に駆け寄って、おさづけの取り次ぎを申し出たようです。そして、その方を東礼拝場へお連れして、おさづけを取り次いだのですが、名前も年齢も聞かず、夢中でお取り次ぎをしたのです。取り次ぎ終えた後に、慌てて名前をお聞きすると、その男性は「中山です」と答えられました。そのお方は、真柱様だったのです。その修養科生がびっくりしたのは言うまでもありません。

身上の方を見かけて夢中でおさづけを取り次いだ修養科生。それを嫌な顔一つ見せず、しかも「ありがとう」とお受けになられた真柱様。何とも言えない素晴らしい情景じゃないですか。教祖はこれをきっとお喜びくださっていると思います。

この情景は親神様の目から見れば、一れつ兄弟姉妹としてのたすけ合いであります。おたすけとは決して一方的なものではあり

ません。親にとっては、子ども同士がたすけ合っている嬉しい姿なのです。

本部神殿でのこの出来事を通して、親神様は勇んでおたすけに励むことを、私たちようぼくに促してくださっているような気がしてなりません。何とかしておさづけを取り次がせていただきたいと、心を定めて日々通っておれば、おのずとおたすけの機会をお与えくださるように思います。この修養科生は、それこそ生涯の心の宝を頂いたに違いありません。

親神様のお眼鏡にかなう成人を

眞明組講名拝戴140周年の年も折り返しの時期になりました。あと半年、この節目の年は、あと半年であります。

おたすけに奔走された、初代や先人のご丹精にお応えできるように、今できること、しなければならないことをしっかりとさせていただいて、教会長として、ようぼくとして、親神様のお眼鏡にかなう成人の歩みを、一歩一歩と勇んで歩ませていただきたいと思います。

どうかこれからのたすけ一条の、また御恩報じの道の心勇んだご丹精をお願いいたしまして、ご挨拶とさせていただきます。

本日の月次祭、大変ご苦労様でございました。（全文）

立教百八十四年　六月月次祭祭文

これの神床にお鎮まり下さいます親神天理王命の御前に、天理教芦津大教会長井筒梅夫、慎んで申し上げます。

親神様には子供可愛い一条の親心から、尽きせぬ御守護にお護り下さり、十全のお働きを以て日々を恙なく結構にお連れ通り下さいまして、陽気ぐらしへとお導き下さいます御慈愛の程は、誠に有り難く勿体無い限りでございます。お蔭をもちまして、私共は御教えの道にお引き寄せ頂き、心嬉しくたすけ一条に励ませて頂いておりますが、その中にも今日の吉日はおぢばよりお許しを頂きました尊き日柄でございますので、只今から役目に与かる者一同、心を揃えて座りづとめ、陽気てをどりを勤めて、六月の月次祭を執り行わせて頂きます。

御前には、ならん中をも今日を大切な一日と参らせて頂きました芦津の道の子達が、日頃賜る御恵みに拝謝し、共におうたを唱和して、心勇む状をも御照覧下さいまして、親神様にもお勇み下さいますようお願い申し上げます。

更には願い出ます身上たすけ、事情治めの上には、教会長、ようぼくの、人をたすける誠の心をお受け取り下さいまして、尊きつとめの理をお垂れ下さり、不思議自由の御守護を賜りますよう重ねてお願い申し上げます。

私共をはじめ芦津の理に繋がる教会長、ようぼくは、親神様の御守護を片時も忘れることなく、節にこもる親心を悟り、教祖の道具衆としての自覚と喜びを高めて、感謝と報恩の心で時旬の御用に勤め働かせて頂く所存でございます。

何卒親神様には、一同の道のために尽くす真実を大らかな御心にお受け取り下さいまして、親神様の思召実現にお役に立たせて頂き、陽気世界に向かう道を一手一つに心勇んで進ませて頂けますよう御守護の程を、一同と共に慎んでお願い申し上げます。

《6月月次祭　神殿講話》

信仰の元一日を思い返し心を定めておたすけを

役員　川畑澄博

信仰の元一日

只今は眞明組講名拝戴140周年の時旬を報恩感謝の気持ちで、皆様方もそれぞれに心を定めて通られていることと思います。

今から約140年前のこと、井筒梅治郎初代様が娘の命をたすけていただき、教祖から、

「大阪へ大木の根を下ろして下されるのや。」

『稿本天理教教祖傳逸話篇』71「あの雨の中を」

とのお言葉を頂戴し、眞明組の信仰は始まりました。

そうした中で、われわれの先輩先生方がたすけていただき、そしてたすかった先生方がまた別の人をたすけ、教祖のお言葉通り、眞明組は大木のように、太く真っ直ぐ、深く根を下ろしました。その教えは瞬く間に大阪を中心として伸び広がり、北は北海道、南は沖縄、そして海外へも繋がりました。

その中の一つである私の教会は鹿児島にあります。初代は、薩摩藩が廃止される明治４年頃まで島津家に仕えていました。その後、「大徳館」という旅館を営み、結構な財産があったそうですが、子供がなかなか育たない。流産してしまうか、生まれてきてもすぐに亡くなる。ようやく一人、大きくなった子がいましたが、病気で医者から手の施しようがないと言われ、初代夫婦は藁にもすがる思いでたすけを願っていました。

そんな中、大阪に嫁いでいた初代の妹が、お道の話を聞いて入信しており、そこからにをいがかかりました。そして子供の身上をたすけていただき、「これは真実の神様だ」と初代夫婦は確信したのだと思います。こうして先人が一生懸命道を繋いでくださったお陰で、今の私があります。

今日、ご参拝に来られた皆様の中には、信仰初代の方もおられるでしょうし、親々から代々信仰を受け継いでいる方もおられます。そこには、必ず入信しようとしたきっかけがあるはずです。

この教えを繋いでくださるのは、代々の先人たちの努力の賜物であると思います。

奉告祭前日の節

私は一昨年、32年間務めた教会長を息子に譲りました。その奉告祭の直前に、神様からお仕込みを頂きました。

奉告祭の前日、参拝予定だった東京のようぼく家族から電話があり、「仕事現場で誤って人差し指を切断してしまったので、申し訳ありませんが、教会に帰られなくなりました」との報告でした。驚いて、すぐに教会でお願いづとめを勤め「どう思案すればいいのだろうか」と思っていたのですが、その後、詳しい説明を聞いて、親神様の大きな親心を感じずにはいれませんでした。

本人は指を切断してしまったのですが、現場の目の前に消防署があり、すぐに救急隊員が駆けつけて、応急処置をしてくれました。またその消防署の近くに病院があり、すぐに手術をしていただいたそうです。その素早い処置のお陰で、指もきちんと繋がり、今では何の後遺症もないそうです。

思い返してみれば、その方は曾祖母の代からの入信で、代々熱心に信仰を重ねていました。こうした代々の伏せ込みのお陰で、大難を小難にしていただいたのだと思います。本人も、普段から自宅近

くの他系統の教会に常に足を運び、しっかりと神様に繋がってくれていました。

不思議なことに、この方のお父さんも、同じように人差し指を大けがする節を無事に御守護いただいております。本人も、二代続けて同じ節を見せられ、奉告祭に頂いた節をしっかりと思案してくれました。そして、今後は毎年必ず鹿児島の教会に参拝する心を定めてくれました。また事故で下りた保険金のほとんどを、お供えとして教会に運んでくださいました。

奉告祭の前日に、指を切断する

という大きな節でしたが、本人たちも含め、教会の者すべてに対して「親々が大事」とお仕込みいただいたように思います。何より、教会全体の心の成人を促されたように感じました。

自ら体験してこそ

神様のお働きを身に感じ、報恩感謝の心で信仰するには、どうしたらいいでしょうか。

私は、自分自身が積み重ねてきた道の上での経験でしか、信仰をつかむことはできないと思います。教典やおさしづ、教祖伝といったお道の本や、たくさんの先生方の素晴らしい体験談も、もちろん勉強になります。しかし、それは自分自身の体験ではありません。これでは自分の信仰として得られないと思うのです。

ある先人の言葉に、「道はどんな道でも通らにゃ分からん。通らん道は道案内できん」と聞かせていただいたことがあります。苦しい体験や「なぜこんなことに」という事情を見せていただき、それを節として成人させていただける。同時に、同じように大変な思いをされている方へのおたすけの際、心から寄り添い、共感することができるのです。

私自身もそうですが、代を重ねて今日に至っており、結構の中に身を置いて、今の結構さが当たり前になってしまっているように思います。周りの人に合わせてもらい、立ててもらい、褒めてもらえるような道では、本当の自分自身の信仰をつかむことはできないように思います。

自分の都合を捨て、神様に合わせ、日々を勇んで伏せ込み、通らせていただくことが、心の成人に繋がると同時に、珍しいたすけが現れる道だと思います。

まず心を定める

不思議なたすけはすべて、それぞれの心定めを神様がお受けくださり、そこから始まると思います。

さあ〳〵月日がありてこの世界あり、世界ありてそれ〳〵あり、それ〳〵ありて身の内あり、身の内ありて律あり、律ありても心定めが第一やで。

明治20年1月13日

とお聞かせいただくように、必ず心定めが先にあるように思います。立教の元一日も、「あらゆる人間思案を断ち、一家の都合を捨てて、仰せのままに順う（したが）旨を対（こた）えた」（『天理教教典』3頁）とのことで天理教が始まりました。教祖が現身をお隠しになられるときには、「命捨ててもという心の者のみ、おつとめせよ」（『稿本天理教教祖傳』329頁）との心でおつとめを勤め、これによって世界たすけが始まりました。

いずれも「我が身、我が家はどうなってもよい」という強い気持ちで心を定め、実行したからこそだと思うのです。できるかできないかは別として、まず心を定める。そして自ら通って、初めて自身の成人に繋がると思うのです。

私たちも旬に親の声を受ければ、

自分の都合を捨て、教会また家族で思案を重ね、しっかりと心を定めて通ることが、不思議なたすけやそれぞれの成人に繋がり、人をたすける一番の近道になると思うのです。

眞明組講名拝戴140周年という旬を、初代の信仰の元一日を振り返り、自分の信仰を見つめ直し、心を定め、自ら求めて成人するきっかけにしたいと思います。

親々の賜物

私どもの教会には、初代真柱様に頂いたお言葉の掛け軸があります。これは姶良分教会二代会長の川畑徳蔵が頂いた物です。

徳蔵は、おぢばで学生時代を過ごしていましたが、弓道と剣道に優れていたそうです。当時、ご本部の吉川満次郎先生が、おぢばでは一番剣道が強く、初代真柱様のお計らいによって、徳蔵と勝負をすることになりました。初代真柱様、本席様の御前で三本勝負をして、徳蔵が勝利したそうです。

そのご褒美に金時計をくださると仰せられたそうですが、あまりにも畏れ多いので辞退し、その代わりとして初代真柱様より御揮毫を頂いたのです。書かれているのは、

すむいへも
きるものもまた
くふものも
おしへのおやの
たまものと忘れ

というお言葉です。

「おや」というのは、親神様はもちろんのこと、理の親も、また自分の親でもあると、私は解釈しております。「すべて親々のおかげだよ」「代々受け継がれている徳のおかげで、今結構に通らせていただけるんだよ」と教えていただいているように思うのです。

私にはたくさんの教えの親がいます。私は結婚するまで、この道を知りませんでした。何も知らない私に、大教会長様をはじめ、多くの先生方が心をかけてくださり、時には厳しくお仕込みくださいました。会長になってからも、たくさんの先輩先生方がさまざまなことを教えてくださいました。

会長になってすぐ、教会の普請に取りかかった際には、信じられないほど、たくさんの節を見せていただきました。子供たちにも身上をお見せいただき、事情で眠れなくなる日もありました。しかし、有り難いことに普請は無事に終わり、無事に通ることができました。

改めて振り返ってみると、親神様、教祖、また大教会長様をはじめ周りの皆様のお力はもちろんですが、先祖代々の徳や伏せ込みのお陰だと感じております。

私は結婚するとき、信仰の違いもあり、兄弟や親族からいい顔をされませんでした。それでも私は7人兄弟の末っ子でしたので、自分の思い通りにすることができました。

分からないなりに真剣に、ようぼくとして、教会長として、無我夢中で通らせていただきました。あれだけ反対していた兄弟たちも、今ではおぢばや教会に来るようになり、「お前が一番幸せそうで、うらやましい」と言ってくれるようになりました。

無我夢中に通った32年間、届かぬながら、代々の徳に守られて、会長というバトンを無事に息子に繋ぐことができました。

コロナ禍の今、おぢばに帰りたくても帰れない、教会に参拝するのも気が引ける、にをいがけ・おたすけも充分にしにくい今日です。しかし、こんなときだからこそ、信仰初代の元一日を振り返り、親親の徳のお陰で代々変わらず結構に信仰できていることを実感し、感謝すること。そして同時に、自分自身の信仰を見つめ直したいと思います。

お教え通りに通れば、お教え通りの御守護が頂けると信じます。まずは身近な方々に目を向け、たすけるために何ができるか、何が成人に繋がるかを考え、心を定め、今自分にできるおたすけをさせていただきましょう。

（要約）

修養科を修えて

《958期》

奇跡の連続を感じて

芦山都分教会
山下あかね（18歳）

修養科に入る前は、おつとめやひのきしんをしている姿を他人に見られるのが恥ずかしく、人目ばかりを気にしていましたが、修養科生活を通して、大きく変わることができました。

修養科は大きな奇跡や御守護を見せていただけるところと聞いていて、それが見たいとの思いで入りましたが、2カ月経っても、大きな奇跡を見ることはなく、私はまだまだ足りていないのかなと思っていました。

3カ月目に入って、かしもの・かりものの教話をする機会があり、いろいろ自分で考えることが増えて、毎日奇跡が起きていると感じるようになりました。

詰所では、重い身上の方が、毎日笑顔で過ごしているのも奇跡だし、病気が進行していないのも奇跡だし、毎日が奇跡の連続でした。それを、かしもの・かりものの教えで気付くことができ、修養科は本当に御守護を頂ける場所だと実感することができました。

3カ月でたくさんのことを見せていただき、心が折れそうになることもありましたが、すべて神様が私に身上や事情を通して教えてくれたのだと思います。

今後は、親に喜んでいただけるように、悩んでいる人に寄り添い、おさづけの取り次ぎやひのきしんも頑張りたいと思います。そして、会長様にお願いされたことを素直に「はい」と言って、役に立てるよう頑張りたいと思います。

六月月次祭　祭典役割

祭主	大教会長	扈者	岩切正教	扈者	山田道弘	座りづとめ	大教会長 井筒敏成 湯川正圀 会長夫人 前会長夫人 竹内艶子	てをどり	奥田正徳 石川道夫 守田清一
指図方	井筒文夫	賛者	西本義之	賛者	花岡忠和	前半	竹内義忠 吉田裕和 中村俊和 榎理恵子 松森明美 岩切孝子		岩切正義 立花善文 葭内浩
						後半	岡本久昭 今川聖一 川畑正博 岩切治代 奥田千晶 河合ふみ子		奥田正儀 新居里実 榎康紀
献饌長	守田清一	伝供	在籍者一同						

笛	瀧本眞二郎	ちゃんぽん	加世田洋	拍子木	今川政治	太鼓	山本義範	すりがね	岡島秀男
小鼓	奥田眞治	琴	奥田富美子	三味線	井筒ちぐさ	胡弓	中村美津代		
笛	木村真次	ちゃんぽん	河端芳雄	拍子木	梶川和隆	太鼓	立花善三	すりがね	瀧本庄司
小鼓	石川健郎	琴	吉田幸子	三味線	梶川りよ子	胡弓	川畑祝子		
笛	樋川泰士	ちゃんぽん	村田光伸	拍子木	西本興正	太鼓	湯川正信	すりがね	吉田裕樹
小鼓	花岡忠和	琴	梶川文子	三味線	加世田陽子	胡弓	山田秀子		

登用

【女子青年】

望月　文

立教184年6月23日

教務部報

神殿修築及屋根葺替願

大島分教会

遷座祭　9月15日
鎮座祭　10月15日
奉告祭　10月16日

大玉分教会（大島部属）

遷座祭　7月28日
鎮座祭　8月28日
奉告祭　8月29日

右、立教184年6月25日お許し戴く。

修養科教養掛（4月～6月）

教養掛主任

西本　義之

教養掛

宗我　道明・日樫　勝郎
今川　聖一・山本　義彦
浜田千代実・岩切　孝子
山田　秀子

教人登録

望月　文（門　司）
荒木めぐみ（恵　庭）

立教184年6月16日

教人資格講習会第112回

三好　忠大（稗　島）
小田川郁恵（名瀬港）

立教184年6月10日

修養科第958期修了

林　之彦（鷺　洲）
沼田　早苗（神　甲）
當島　孝人（芦大熊）
山下　乃杏（芦山都）
坂口　泉（芦山都）
山下あかね（芦山都）

立教184年6月27日

おさづけの理拝戴《5月》

石川　公子（直　轄）
山下光乃理（島　原）
岩切　寿代（島　原）
北村　健治（芦　姫）
小野田駿平（順　世）
黒原　大聖（紀　内）
畠山　琴葉（芦　玉）
坂口　泉（芦山都）
田岡　正太（高　清）
毛利　俊太（東大屋）
南方　侑也（西　浜）

〈拝戴順　11名〉

■訃報■

明高分教会三代会長（靭部属）

久米輝彦氏（くめてるひこ）

令和３年６月14日出直された。77歳。

告別式は、６月16日井筒文夫大教会役員斎主のもと、明高分教会で執行された。

氏は、昭和18年10月８日父・久米利明、母・ユキ子の次男として徳島県名西郡に生まれた。37年２月２日おさづけの理拝戴、41年３月天理大学文学部宗教学科卒業、同年６月28日修養科第300期修了、43年２月教会長資格検定合格、同年３月24日教人登録、51年３月16日松森千壽子と結婚、52年10月26日明高分教会三代会長に就任、平成28年２月26日辞任。

大学卒業後は、おぢばで学ぶ学生を預かる眞明寮（詰所）の寮長、天理大学北寮初代幹事を歴任、若年層育成に尽力された。

教会本部では修養科一期講師、大教会では部内一斉巡教員、布教推進員、修養科教養掛、教区では徳島西支部長、布教の家徳島寮寮長などを務められた。上級・靭分教会役員として真実を尽くし切られ、平成11年10月には神殿移転普請をされた。

月例統計（自令和３年１月１日～至令和３年５月31日）

項目 / 名称（）内教会数	初席	おさづけの理拝戴	修養科修了	教人
大教会（1）	9	3		
靭（13）				
東津（23）	4	2	2	2
吉野川（29）		1		
島原（17）		5		
日方（15）	2	2		
稗島（8）	1	2	1	
本津（2）				
日高（2）				
姶良（5）				
津和（13）				
門司（6）				
當別（6）				
大島（27）	4	5	2	
沖縄（3）				
尼崎（2）		2		
四ツ山（5）				1
大冠（2）				
島下（1）				
天保山（3）	1			
青木（1）				
芦浪（1）		1		
甲邊（1）				
芦華（1）				
天津（1）				
入江（1）				
豊野（1）				
紀周（3）	3			
勝明（1）				
神の島（1）				
兵庫眞洲（1）	1			
芦ノ郷（2）				
本明勇（2）				
明道（1）				
芦東（1）				
和鎮（3）		1		
神滝本（1）				
芦明徳（1）		1		
真明彰化（2）				
本氣（2）				
芦明照（1）				
真伯（1）				
合計（213）	25	25	5	3